

# 「敵国研究」の原点に戻ったロシア研究

服部 倫卓

## 終わりの見えないロシア・ウクライナ戦争

二〇二二年二月二十四日にロシアのプーチン政権が開始したウクライナへの全面軍事侵攻は、終わりが見えない。ロシアが停戦に前向きといった話が時折聞かえてくるが、プーチン大統領はウクライナに無条件降伏を実質的に要求しており、とてもウクライナのゼレンスキー政権が飲めるものではない。米大統領選を受け風向きが変わることは考えられるものの、停戦・和平実現の難易度は高い。

今後、戦線が膠着し、戦いが低強度化していく可能性はある。しかし、ロシアとウクライナの戦争は領土

戦争という性格を強め、ゼロサムゲームになってしまった。プーチンが元々要求していた北大西洋条約機構（NATO）のウクライナへの不拡大といった事柄ならまだしも、領土紛争は妥協が難しく、特にクリミアは難問である。

ロシアによる破壊・殺戮行為に対し、ウクライナおよび国際社会はロシアに賠償の支払いと戦争犯罪人の引き渡しを要求することになり、この課題もロシアの体制が変わらない限りクリアされそうもない。かくして、いずれ戦火が収まることはあるにしても、ロシアとウクライナおよび欧米日との厳しい対立関係は長期

化・常態化すると想定せざるをえない。

私自身のことを述べれば、二〇二二年九月までは、一般社団法人ロシアNIPS貿易会という民間の経済団体で働いていた。日本とロシアその他の旧ソ連諸国との経済関係を促進するのが同団体の任務で、私はロシア情勢を分析し会員企業に情報提供することを職務としていた。二〇二二年十月に現在の北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターに奉職したものの、それは戦争とはまったく関係なく、単に転職のタイミングが戦争と重なっただけである。

かつて対露経済協力に向けた情報提供を生業としていた自分が、ここ二年あまりはロシアからの外国企業の撤退、対露経済制裁といったことを中心的な研究テーマにしているのだから、皮肉なものだ。

### なぜロシア語を学ぶのか

私事にわたって恐縮だが、私は一九八四年に東京外国語大学ロシア語学科に入学し、ソ連研究をスタートさせた。

外大に入る学生は、英語が好きで、「英語にプラスしてそれ以外の語学も身に付けたい」という志望動機が多い。まず外大を選択し、その中から何語を選ぶかを考えるパターンである。かく言う私も、外大を志望

校に決めたのは早かったものの、何学科を受けるかなかなか決まらなかった。現役の時には、ヨーロッパへの漠然とした憧れから、ドイツ語学科を受験し、あえなく不合格となった。

孤独な宅浪生活も半ばに差し掛かった一九八三年九月一日、大韓航空機撃墜事件が発生する。ソ連領空を侵犯した大韓航空機がソ連の戦闘機により撃墜され、二百名以上が犠牲になった。衝撃を受けた私は、民間機を撃墜する国家とはいかなるものかを究明したいという思いから、外大ロシア科を受験することを選択した。前年に漠然とドイツ科を選んだのとは違い、今回は「敵を知る」という明確な動機による選択であり、今度は合格を勝ち取った。

さて、外大に入ってみて、同級生たちはどのような理由でロシア語を選んでいたかという点、実は「さしたる理由はない」という人が大半だった。言語ごとの需要や人気に応じた学科の序列があり、自分の偏差値や共通一次試験の得点がこれくらいなら、この学科くらいが丁度良いという相場観があったのだ。

明確な目的意識でロシア語を選ぶケースとしては、文学やバレエといったロシア文化への関心ゆえという人は、一定数いたと思う。また、一九八〇年代の半ばには絶滅危惧種と化していたが、学生運動や社会主義

に傾倒し、それゆえにソ連の言語であるロシア語を学ぼうとする人も、ごく少数ながらいた。

そうした中で、「敵を知る」という動機でロシア語を学ぼうなどという向きは、私の他には見当たらない。ロシア語学科全体には、「ロシア語を学ぶからにはロシア文化に親しもう」というムードがあり、今日まで続くロシア民謡サークル「ルムーク」が創設されたのも我々の代であった。私はそういう雰囲気には馴染めず、尖った洋楽などを聴きながら、斜に構えていた。ただ、「好きこそ物の上手なれ」とはよく言ったもので、ひたすら「敵を知る」という義務感だけで学ぶ語学は上達しないということを痛感させられたが。

戦後の米国でコロンビア、ハーバード、MITなどを舞台にソ連研究が発展したのは、明確に「敵国研究」を目的としたものだった。その意味では、私の発想は決して突飛ではなかったはずだが、いかんせん外語の環境では孤立していた。

### ソ連から新生ロシアへ

元々は一九八〇年代前半に再燃した東西対立への危機意識からソ連研究を志した私だったが、研究を進めるにつれ、関心が移っていった。冷戦下でも東西間の

経済協力の例はあり、他方でソ連の人権侵害やアフガン侵攻を受けた経済制裁も発動された。そうした現象に注目した私は、東西貿易、経済制裁、政治と経済のリンケージといった問題群に興味を惹かれたのである。

その頃になると、最高指導者ゴルバチョフの下、ソ連では変革の嵐が吹き荒れ、国際的にソ連への注目度・期待感が高まっていた。そうした折り、社団法人ソ連東欧貿易会（現在は一般社団法人ロシアNIS貿易会）が、付属のシンクタンクとして「ソ連東欧経済研究所」を設立することになり、その研究員を募集しているという情報を得た。院に進むよりも有望な進路に思えたので、私は一九八九年四月の研究所発足とともにその研究員となり、以降三十余年在籍することになる。

ソ連を改革しようとしたゴルバチョフのペレストロイカは、勢い余って、一九九一年暮れにはソ連という連邦国家の解体、社会主義体制の崩壊をもたらした。私が知ろうとした「敵」、民間機を撃墜する国は、消滅した。それでも、その頃には私はすっかり、経済そのものへの関心を深めていたので、研究のモチベーションが低下するということはなかった。ロシアの経済・政治情勢を分析して、ロシアビジネスを手掛ける

日系企業向けに発信し、時には自ら対ロシア支援事業に従事するという仕事に、やり甲斐を感じながら取り組んでいた。

### またも撃墜された旅客機

二〇〇〇年にロシアでプーチン政権が成立し、強権的な手法が物議を醸すことがあっても、ロシアはまだG8に名を連ねていたし、新興市場として期待を集める存在にもなっていた。

しかし、ロシアと欧米の間には、ウクライナの地政学的な帰属を巡って、二〇一四年に大きな亀裂が生じる。同年二月にウクライナで政変が発生すると、ロシアは三月にウクライナ領クリミアの併合を強行し、さらに四月以降はドンバス紛争が続いた。

そんな矢先に起きたのが、七月のマレーシア航空機撃墜事件であった。ロシアのブークミサイルが、ドンバスの親露派支配地域に運ばれて発射され、乗客・乗員二百九十八名が犠牲になったものである。前述のとおり、個人的には一九八三年の大韓航空機撃墜事件がソ連研究の出発点だっただけに、三十余年の時を経て、またもロシアがかかわる形で民間機が撃墜され、まるで自分のルーツに追いかけているような、とても嫌な感覚を覚えた。

そして、事態はついに、二〇二二年二月二十四日の全面軍事侵攻開始に至る。事ここに至って、私にはもう、「敵国研究」という自らのスタート地点に立ち返る他に選択肢はなくなつた。元に戻つたという意味では、別に構わないのだが、それにしても、自分が生涯をかけて究明しようと思つた「敵」が、キャリアの初期に唐突に終焉し、その後協力パートナーとしてずっと接してきたのに、キャリアの終盤近くになり再び「敵」として立ち現れてきたというのは、複雑な心境だ。

もちろん、プーチン政権とて永遠ではあるまい。しかし、二〇二四年三月の大統領選を乗り切り、五期目の政権をスタートさせたプーチンは、少なくとも二〇三〇年五月まで権力の座が保証されている。私は二〇三〇年三月に定年退職を迎えるはずなので、自分が現役でいる間は、「敵」としてのロシアを前提とせざるをえない。

それにしても、昨今困っているのは、日本のアカデミズム界隈の不文律で、ロシアへの渡航やロシア人研究者との研究交流などがタブーとされてしまつてのことだ。「ロシアのような国と付き合うことはけしからん」というプリミティブな理屈が幅を利かしている。もとより私はロシアと仲良し小好しの関係を築き

たいのではない。国際社会にとってますます厄介になるロシアという存在を解明するため、研究対象と格闘したいのである。ロシアが入国を拒むならともかく、日本がロシア渡航を禁止してどうする。

日本の関係者の中には、「いずれ関係が正常化する時のためにもロシアとの付き合いを続けるべき」とおっしゃる方もいる。私自身はむしろ、我々の目の黒いうちに事態が好転することはないと割り切り、残された研究人生を「敵国研究」に向けていくつもりだ。

（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授、北大・学術博・平29）

### 「学士会会員証」について

「学士会会員証（普通会員用）」は、毎年三月号に同封してお送りしております。

再発行は学士会館フロントでお申し付け頂くか、郵送希望の場合は、返信用封筒（住所・氏名記入・切手貼付）を学士会事務局会員管理担当までお送りください。

資料請求・見積作成  
無料

## 出版のすすめ

研究書・論文集

評伝・自分史

随想・小説

詩集・句歌集

画集・写真集

社史・追悼集他

▼お問い合わせ▲  
平日午前10時～午後5時。お気軽にご相談ください。

昭和32年創業 日本初のオーダーメイド専門の出版社

**中央公論事業出版**

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-10-1  
IVYビル5階

<https://www.chukoji.co.jp/>

TEL : 03-5244-5723

E-mail : [mail@chukoji.co.jp](mailto:mail@chukoji.co.jp)